

なぜ英旅行家イザベラ・バードの碑が山形に6カ所もあるか

2023/10/28 08:00

ライフ | トラベル 地方 | 北海道・東北 山形



山形県内にあるイザベラ・バードの6つの碑。（左上から時計回りに）飯豊町手ノ子地区▷川西町フレンドリープラザ▷上山市の月岡公園▷山形市立病院済生館▷天童市の天童公園（真ん中の碑）▷金山町の大堰公園（いずれも柏崎幸三撮影）

いまから145年前、明治初期のわが国を訪れ、文明開化期の日本と日本人の姿を克明に記録した英国の女性旅行家、イザベラ・バード。「日本奥地紀行」に記されたその足跡は東北、北海道から関西にまで及ぶが、214日間の滞日中、わずか5日間しかいなかった山形県に、彼女を記念した碑が6つもある。なぜか。碑を手がかりに、バードと山形の人々の思いをたどった。

145年前の日本人

《明治十一年七月十三日 イザベラ・バードここを通る》

新潟、山形両県をつなぐ国道113号を、山形県小国町から新宇津トンネルを抜けて飯豊町側入ると、にこう書かれた碑が旧国道の杉木立の中、ひっそりと建っていた。

明治11（1878）年7月13日、バードは牛や馬の背に揺られて新潟から山形へ入り、宇津峠を越えたところにある、ここ手ノ子（てのこ）集落で休んだ。

バード研究者で京都大名誉教授の金坂清則氏が翻訳し、詳細な注を施した「完訳日本奥地紀行」（平凡社東洋文庫）によると、バードは集落で酒と茶、ご飯、黒豆を振る舞われ、同行の通訳を介して人々と話をした。以下、引用は同書による。

暑がっているバードに気づき、集落の女性たちはうちわを取りだして、丸1時間あおいでくれた。料金を尋ねると「いただけません」と言い、どうしても受け取ろうとしない。

「異人さんにお目にかかったのは初めてです。お金をいただくなどという卑しいことはできません」

そう言って砂糖菓子までくれた女性たちに、バードは英国製のヘアピンを数本あげる以外に何もお返しできず、心が痛んだという。

《私は、日本のことを思い出すかぎりみなさんのことは決して忘れませんと言ってそこを出た。人々の優しさに触れ胸がいっぱいになった》

地域の「たから」

イザベラ・バードは1831（天保2）年、英国で牧師の家に生まれ、成人してから世界中を旅して多くの旅行記を著した。好奇心旺盛でいて、冷静沈着なその人柄は、著作を通して現代にまで伝わっている。

日本を訪れたのは47歳のとき。明治11年は戊辰戦争からまだ10年で、バードが横浜へ到着した5月20日の6日前には現在の首相に相当する内務卿、大久保利通が暗殺された。国内の政情が落ち着かない一方、文明開化の波は地方にも押し寄せていた。

バードは「本当の日本に入っていきたい」と、ハリー・パークス英国公使の尽力により日本政府発行の「外国人内地旅行免状」を得て、北海道を目指した。

東京、日光、福島、新潟をへて、「完訳 日本奥地紀行」によると山形県には7月13日午後に入り、手ノ子集落を通過して小松（現川西町）で宿泊。その後、上山、楢岡（現村山市）、新庄、金山に宿泊し、18日早朝、金山をたって秋田県へ抜けている。

手ノ子地区の碑は、バードが通った宇津峠からの出口に建つ。碑文によると平成30（2018）年、地域の団体、手ノ子区協議会宇津峠部会と飯豊史話会が建てた。すぐそばには令和3年、手ノ子小の2～6年生20人が考えたという標語がパネルに並んでいた。

《大切な 手ノ子のたから うつとうげ》（2年生）

《イザベラと 歩くその道 宇津峠》（5年生）

同小の全校児童は現在15人。だが、子供たちはバードを通じて地域の「たから」を見つけたようだった。

故郷アルカデヤ

手ノ子集落を出て現在の川西町中心部、小松へ向かったバードは、峠道で眼下に広がる米沢盆地を望み、「アジアのアルカディア」という、いまや著名になった最大級の賛辞を贈った。

《至る所に富裕で美しい農村集落がある。家は大きく、梁（はり）には文字が刻まれ屋根はどっしりとした瓦葺きで、自分が所有する農地に回りを囲まれて建っている》

《山腹を何とか削って開いたわずかな農地も…この上なく見事に丹念に手入れして完璧な耕作が行われ、気候に適した作物があふれるほどとれる…「怠け者の畑」はここ日本には存在しない》

バードが絶賛した豊かな田園地帯は現代まで受け継がれている。川西町とバードの縁も続き、昭和48（1973）年に刊行された日本旅行記「日本奥地紀行」は、町出身で慶應義塾大名譽教授だった英語学者、高梨健吉氏が翻訳した。

この訳書は日本旅行記全体の半分ほどの「普及版」の翻訳だったが、ベストセラーとなり広く日本人にバードの見た日本を紹介した。川西町は昭和60（1985）年、町合併30年を記念してバードの碑と塔を建てた際、高梨氏の筆による名訳を碑に刻んだ。

《小松は美しい環境にある町である。置賜盆地は、まったくエデンの園である。鋤（すき）で耕したというより鉛筆で描いたように美しい。実り豊かに微笑する大地であり、アジアのアルカデヤ（桃源郷）である》

碑は当初、町埋蔵文化財資料展示館の庭にあったが、閉館のため現在は町立図書館などがある複合施設「川西町フレンドリープラザ」の緑の庭園へ移されている。

「丸屋根の病院」

《山の斜面というすばらしい所に、人口三千人以上を有する温泉場上山（かみのやま）があった》



山形2日目の宿泊先は、上山温泉で知られる上山だった。ちょうど夏祭りの真っ最中で、《どの家も提灯と旗を飾り、神社の境内は大勢の人でいっぱいだった》。

バードは大きな庭のある蔵座敷へ泊まり、庭まで引かれた風呂で峠越えの疲れを癒した。

《もしここが外国人の遊歩区域内であれば、外国人はここが健康によい保養地になり、あちこちに出かけて美しい景色を楽しめる所であることがきっとわかる》

上山市は現在、温泉に加えて古い町並み、天守閣が再現された上山城が、内外の観光客を迎えている。

バードを偲ぶ碑は、市のシンボルである上山城に隣接する月岡公園に静かにたたずんでいた。バードの没後100年の平成16（2004）年、市制50年を記念し市が建立した石碑には「イザベラ・バード 上山称賛の丘」とあった。上山の人たちは、バードの称賛をまちの誇りとしたに違いない。それは次に訪れた県都山形も同様だった。

《人口二万一〇〇〇人の繁栄する町であり、〈県〉都でもある山形は…県庁が大通りの突き当たりに堂々とあるために、日本の町の中では珍しく存在感がある》

初代県令の三島通庸（みちつね）が建設した県都には、洋風ながら和風の要素をもつ「擬洋建築」の官庁街が出現した。

《丸屋根の塔が付いた大きな二階建の病院は完成間近で、一五〇人の患者を収容し、医学校になる予定である。設備は非常によく整えられ、換気もよい》

医学校は実現しなかったものの、「丸屋根の病院」は、現在もその地に建つ山形市立病院済生館。敷地内に令和2年3月、バードの顕彰碑が建立された。6つの碑のうち最も新しい。

碑建立の実行委員長を務めた済生館の桜田俊郎名誉館長（86）は「この地にあった旧済生館にバードはその昔、立ち寄り、『換気がよく衛生面に優れた病院』と書いてくれたのは、うれしいこと。バード自身、同時代人だったナイチンゲールの看護学も勉強していたようだ」と話す。

旧済生館本館は近くの城跡公園へ修復移築され、当時の面影を伝えている。

山形市の北、天童市の天童公園（舞鶴山）にはバードの文学碑がある。市制45年記念として平成15（2003）年に建立された。志賀直哉、田山花袋の天童ゆかりの文学者の碑が3つ並び、バードの碑はその真ん中で最も古い。

天童での宿泊を希望したバードだったが、あいにく部屋が空いておらず、宿泊はかなわなかった。《宿屋はすべての部屋が蚕（かいこ）でふさがっていたので、私を受け入れることができなかったのである》。代わりにその日は楯岡（現在の村山市）まで羽州街道を進み、翌日は県北の新庄までたどり着いている。

条例に奥地紀行

バードが山形で最後に訪れたのは現在の金山町だった。町には「日本奥地紀行」の引用から始まる、一風変わった条例がある。昭和61（1986）年制定の「金山町の風景と調和した街並み景観条例」。

《“険しい尾根を越えて、非常に美しい風変わりな盆地に入った。ピラミッド形の丘陵、杉の林で覆われ、その麓に金山の町がある。ロマンチックな雰囲気のある場所である。私は一日か二日ここに滞在したいと思う…”（略）わたしたちの町金山は、羽州街道沿いに開けた宿場町で、白壁造の土蔵、住いが周囲の山々の緑に映える落ちついた街並みはバード女史が訪れて一世紀過ぎた今もあまり変わりにく…”》

金山町は、新庄市から羽州街道の国道13号を北へ進み、市町境にあたる峠を過ぎると、眼下に見えてくる。緩やかな丘陵から見える整然と続く田んぼ、杉に覆われた里山…。バードが書いた「ピラミッド形の丘陵とは、このことなのだろう」と合点する。

町を歩くと、黒やこげ茶色の屋根と杉の下見板張り、白壁の家並みが続く。宿場町として栄えた往時のままの光景だ。条例はバードがたたえた町の景観を生かそうというもので、家を建てる際に最高50万円を助成している。

元町職員の西田徹さん（68）は「『景観は公共性が高い』というバードの言葉に行政も住民も触発されて、街並み景観条例が生まれた。金山の風景と調和した町並みという意味で、条例名に『風景』という言葉を入れた」と振り返る。

町はバードの旅から100年後の昭和53（1978）年、後に町長になる町職員、松田貢氏の発案で記念碑を建立した。県内で第1号だった。

町中心部の大堰公園にある碑は銀色の金属製で、時折差し込む太陽の光に輝いていた。その前を、隣の小学校から下校してきた子供たちが通っていく。碑自体も建立から45年がたち、町の風景とすっかり調和しているようにみえた。

本当の「活性化」

山形市在住のバード研究家、渋谷光夫さん（75）は「明治初期に来日した外国人は多くの記録を残したが、いずれも役人の視点で書いたものばかりだった。バードの筆致は、人々の視点で描かれているところが重要だ」と指摘する。

バードが冷静に、かつ温かな筆致で描いた山形の人々の姿。その子孫たちが後年、県内に建てた6つの碑を巡って見えてきたものは、山形の人々がバードという異国から来た観察者によって、地域の「価値」に気づいていくさまだった。そうした地域資源を、地域の活性化へと結びつけていこうとする営みだった。

外国へ出ると日本のよさが分かるといわれる。同じように、異邦人のバードは日本の「たから」をくっきりと映しだす、鏡のような存在なのかもしれない。

（柏崎幸三）

©2020-2023 The Sankei Shimbun. All rights reserved.